

第3章 平成12年度山口大学構内の試掘調査

第1節 常盤構内の試掘調査

1 福利厚生棟新営に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

平成12年度補正予算により、常盤構内に福利厚生棟の新営が確定したことを受けて、新営建物予定地の試掘調査を行った。調査期間は平成12年2月26日～3月8日である。調査トレンチはA～Dの4箇所、A・Bトレンチは新営建物に伴う共同溝部分、C・Dトレンチは新営建物予定地内に設定した。建物予定地には既設のサークル棟及び売店が所在するため、調査トレンチを建物予定地の西部に設定せざるを得なかった。このため、東部については、予定地東側に一段低く敷設されている構内道路との間の崖面を調査することで補足した。調査面積はAトレンチが4㎡、Bトレンチが2㎡、Cトレンチが23.5㎡、Dトレンチが9㎡、合計38.5㎡である。

(2) 基本層序 (PL.20)

A・Bトレンチでは、現地表下約15cmまでが表土で、その直下が地山であった。Cトレンチでは、現地表下20cmまでが表土・造成土で、以下約20～40cmは地山、約40cm以下が岩盤であった。Dトレンチでは、現地表下約20cmまでが表土・造成土で、以下約20～75cmは地山、約75cm以下が岩盤で、東側崖面はC・Dトレンチとほぼ同様であった。

(3) 調査の成果

今回の調査では埋蔵文化財を検出することができなかった。これは調査トレンチの周辺が大学造成により大規模な削平を受けているためである。グラウンドは新営建物予定地より約1m標高が低く、北西方向に向かって落ち込む谷を埋め立てて造成している。この際、標高の高かった南西辺と南東辺を削平したようで、A・B調査区の表土直下が岩盤となるのはこのためと考えられ

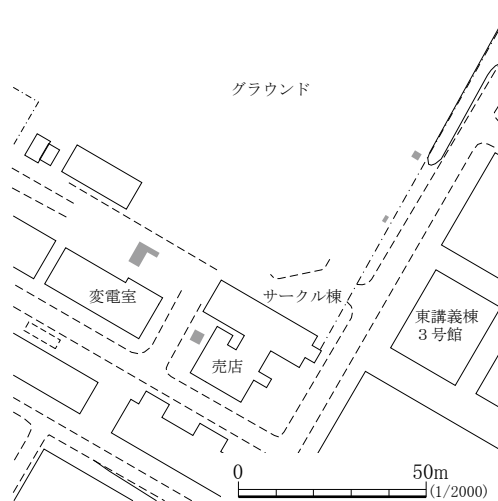


Fig.22 調査区位置図

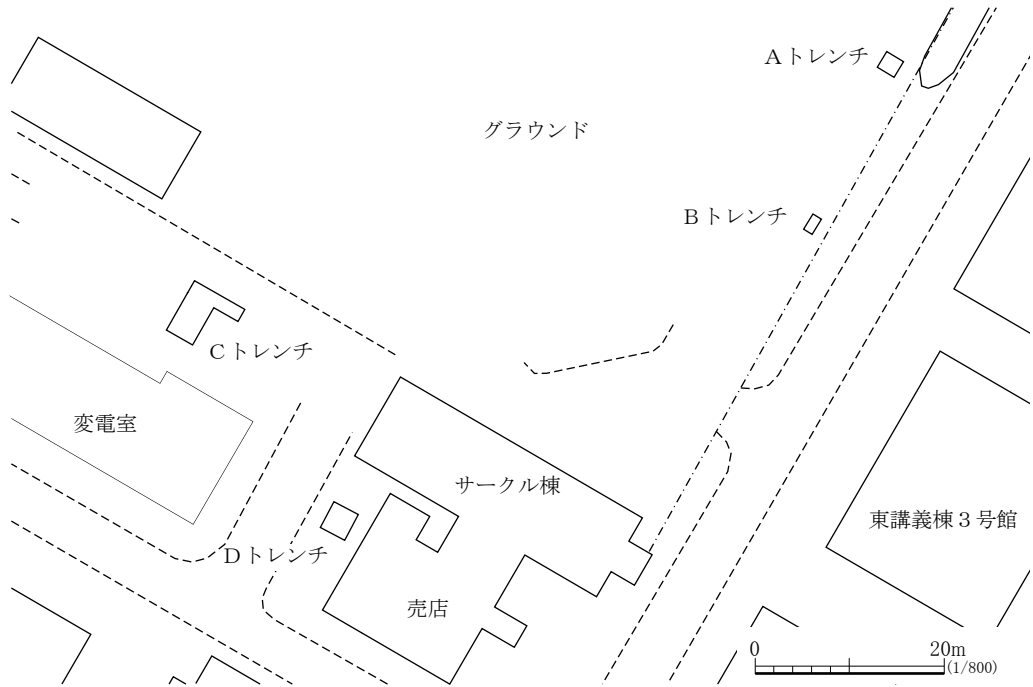


Fig.23 調査区設定位置図

る。一方、新営建物予定地は、上記のようにグラウンド・周辺の学科棟よりも約 1 m 標高が高い。予定地内の既設建物は工学部発足当初（昭和23）のものであることを踏まえると、予定地を残して周囲を削平したことが推測される。C・Dトレンチでは削平が著しかったものの地山は残存しており、南側へ向けて厚く堆積している状況が確認できた。今回調査地点周辺の旧地形はC・Dトレンチ付近から北西側は谷地形で、南西から西側にかけてもなだらかに傾斜していたと推測される。

[注]

- 1) 本報告は村田裕一「工学部福利厚生棟新営工事に伴う試掘調査」(『平成 13 年 3 月 26 日埋蔵文化財資料館運営委員会資料』、2001 年) を元に田畑が執筆した。